

グローブ座の誕生

グローブ座の誕生

磯 山 甚 一

The Construction of the Globe Playhouse

Jinichi Isoyama

ブラックフライアーズ劇場の挫折

ロンドンの北郊外ショアディッチにあった劇場座は、解体されたあと材木としてテムズ川を越えて運ばれ、やがてグローブ座として装いも新たに堂々たる威容をあらわした。これはエリザベス朝の演劇の研究者にはなじみとなっている物語である。旧劇場の解体から新劇場の建築までの指揮をとった棟梁がピーター・ストリートという名前であったこともよく知られている。

当時の宮内大臣一座には、グローブ座という新劇場建設は十分投資にみあうという判断があったはずであるが、ちょうど2年ほど前にさかのぼって、1596年11月には、多額の投資をしてブラックフライアーズの修道院跡の建物を劇場に改装したものの、周辺に住む貴族たちの抵抗で実際には使

用できなくなってしまったという苦い経験があったばかりである。ブラックフライアーズ劇場そのものは所有しているが、自分たちで利用できる状況ではなかったのだ。

ただ、ブラックフライアーズ劇場が使用できたと仮定した場合、ジェイムズ・バーベッジがその劇場をどのように位置付けようとしていたのかは謎のままである。一つには、借地権交渉の難航している劇場座に替わるものであったかもしれない。そうだとすれば、劇場座という屋外劇場に替わって屋内劇場を使用するという画期的なことになったはずだ。この時点では成人劇団にとっては公衆劇場と私設劇場の区別はなかったから、この可能性が高いと考えられる。ただ、収容人数はずっと減ることは確かであるから、それにどう対応しようとしたのだろうか。

もう一つの可能性は、劇場座の借地権延長問題とはまったく関係なく、冬のあいだに屋内劇場として使用する目的で手に入れたものであったかもしれない。実際、1594年の一座結成の年の冬は、屋内劇場であるクロス・キーズ亭を使用したことがあった（ずっと使用していたのではないかという考え方もあって、使用していないとすれば冬の間の興行はどうしていたのかがよくわかっていない）。1583年に結成された女王一座は、冬の間は屋外劇場（雄牛亭）、屋内劇場（鐘亭）を交互に使用して、天気によって左右されずに上演できる体制があった。ブラックフライアーズ劇場の取得は、もしかするとこのような伝統にならったものであったかもしれない。

どちらの目論みでブラックフライアーズ劇場を作ったにせよ、その劇場は使用不可能になってしまった。そういう状況でグローブ座建設の話がもちあがってきたわけである。ブラックフライアーズ劇場が使用可能であったならばグローブ座はうまれなかったのか、それとも、ブラックフライアーズ劇場が使用可能であったとしても、グローブ座はいずれは建設されたのであろうか？

グローブ座の誕生

このような仮定の質問には歴史は答えてはくれないが、屋内劇場であったブラックフライアーズ劇場は、17世紀はじめ1608年になって選ばれた観客層を対象に冬場使用するようになったあとでは、入場料金が高く設定してあったことも手伝って、夏の間使用していた屋外劇場であるグローブ座よりも、一座の経済のなかでずっと大きな比重を占めるようになったことは確かなことである。ブラックフライアーズ修道院跡の買収と劇場への改装を決意したジェームズ・バーベッジは、劇場座を建設したときの決断とも比較できる大英断をしたことになる。ただし、これは結果的にそう評価できるということであって、ブラックフライアーズ劇場が使用さしとめになったあとでは、バーベッジ率いる一座は当然そこを使用する気はなかったのである。

だが、1596年にブラックフライアーズ劇場を改装した当初使用差し止めにならなかったとしたら、シェイクスピアの最も充実した時期の戯曲はそこでも上演されたはずであり、ブラックフライアーズ劇場の位置付けがどのようなものであったにせよ、新劇場（グローブ座）の建設はもう少し後にずれこんだかもしれない。また、劇場座が地主とのトラブルによって移転することをせまられず、そのまま使用可能であった場合を想定すると、その場合にもグローブ座はやはり建設されるべきであったのだろうか？

以下の考察は、以上のような観点からグローブ座の建設の意味を探ってみようとするものである。

宮内大臣一座の誕生

劇場座の借地期限の延長交渉が再開された1596年頃から1599年のグローブ座の誕生までの数年間は、実際のところシェイクスピアの一座にとって激動の数年間であった。それ以前にもエリザベス朝の演劇界が揺れ動いた

時期はあった。疫病の蔓延や、政治的状況、演劇の庇護者の事情によって絶えず劇団は浮沈を繰り返し、再編成されていた。しかし、この期間のシェイクスピアの一座は、そうした激しい揺れを経験しつつも、一座の解散や分裂・合併などはないまま、なんらかの求心力の作用により団結を続けることができたのであった。この時期の一座のたどった足跡は、かなり詳しくあとづけることが可能である。

シェイクスピアが加わった宮内大臣の一座が結成されたのは、1594年のことであろう。当時の宮内大臣は、ハンズドン卿ヘンリー・ケアリーである。ヘンリーは、母親はエリザベス女王の母親アン・プリンと姉妹のメアリーであり、女王とはいとこにあたる有力者であった。1559年にハンズドン卿となったあと、ずっと劇団の庇護者であった。庇護者が宮内大臣の職にあるということは、一座にとってとりわけ有利なことであったにちがいない。なぜならば、宮内大臣は宮廷、ひいては政府のなかで演劇と深くかわる祝典局を統括する立場にあったからである。

ハンズドン卿ヘンリーが宮内大臣になったのは1585年7月4日のことである。ハンズドン卿おかかえの一座は宮内大臣一座となった。ただ、このときの宮内大臣一座と、1594年以後の宮内大臣一座にどのような連続性があるのかははっきりしない。1584年に、「劇場座の所有者」が『ハンズドン卿の庇護のもとにある』と主張したが、その所有者とはジェームズ・バーベッジであるとみなされるから、バーベッジはハンズドン卿のなんらかの庇護のもとにあったのかもしれない。バーベッジは、1572年（レスター伯爵への書簡）、1574年（5月10日付けの特許状）にはレスター伯爵一座の幹部俳優であったことがわかっているから、その後なんらかの理由でハンズドン卿の庇護を求めることになったのであろう。

1592年の夏から始まった疫病は、もっとも実入りのよいロンドン市内で興行ができなくなることで演劇界にも大打撃を与えて、劇団の再編成が進

むことになった。1594年には疫病も治まったので、その結果うまれたのが新生なった宮内大臣一座であった。それまでストイレンジ卿一座とペンブルック伯爵一座に所属していた俳優たちが結成したのである。

この中におそらくシェイクスピアも一人として加わっていたであろう。すでに芝居の作者として名をあげていたシェイクスピアであるが（ロバート・グリーン「成り上がり者の鳥」は1592年）、当時の劇団は俳優たちが株主として参加した組織であり、シェイクスピアも俳優としての資格で加わっていたのである。しかも幹部の俳優であった（翌年1595年3月15日の王室財務官会計簿の支払い記録）。

一座の名が最初に現われるのは、1594年の6月にニューイントン・バッツ座で海軍大臣一座と交互に上演したとの記録である。さらには冬の間は、ロンドン市内グレイスチャーチ街のクロス・キーズ亭（屋内劇場であったらしい）も使用していたらしい（10月8日にハンズドン卿がロンドン市長にあてて書簡を送り使用許可を求めている）。

では、劇場座ははたして使用していたのか。一座結成の年の6月にニューイントン・バッツ座での上演のあとで、海軍大臣一座が薔薇座へ移ったと同時に、宮内大臣一座は劇場座へ本拠を構えるべく移ったらしい。所有者ジェームズ・バーベッジの息子のリチャードは、宮内大臣一座の幹部俳優であったから、一座の結成当初から使用していた可能性は高い。

劇場の所有者（ジェームズ・バーベッジ）が一座の幹部俳優の父親であるとしても、劇場使用料として栈敷からのあがりすべてか、栈敷の半分を支払っていたであろう。当時の一般的な劇団と劇場所有者との関係でビジネスが行なわれていたと考えられる。後にグローブ座を建てたとき、劇場を所有し運営にあたったのが俳優たちの共同組織であったのは、当時の一般的な劇場の所有形態にてらしてみれば異例のことであった。

劇場座は公衆劇場と呼ばれる専用劇場の最初のもので、それらのものの

うちでは第一世代にあたり、ヘンズロウの薔薇座のように、グローブ座以後の第二世代の劇場と比べると小型の劇場であったろう。薔薇座の収容人員は、1592年の改修前で約2,000人とみられているので、劇場座もおそらくそれくらいではなかったか。規模としては、このあとにできる白鳥座やグローブ座はこれをはるかに上回る3,000人とされているから、まだまだ演劇娯楽に対する需要は高まりつつあった時期であった。

かくて宮内大臣一座が劇場座に本拠を構えて落ち着いた1594年時点で、ロンドン周辺には4つの公衆劇場があった——劇場座、カーテン座、ニューイントン・バッツ座、そして薔薇座。やがて1596年にはずっと規模の大きい白鳥座が開設されるはずである。これらが第一世代の劇場群である。市内にはむろんクロス・キーズ亭などの宿屋劇場があったが、1595年以降は使用されなかったかもしれない。

これに対して、ロンドンに本拠をおく劇団はどれくらいあったのか、正確な数を確定するのは難しい。のちに1598年2月になって枢密院は、ロンドンの劇団の数をはっきりと二つ（宮内大臣一座と海軍大臣一座）に限定するとの命令書を、祝典局長官と、ミドルセックスとサリーの治安判事あてに送ることになる。ロンドンでの興行はもっとも実入りの期待できるものであったから、地方の劇団には絶えずロンドンに進出しようという意欲があったのである。

劇場座の借地期限

1594年に結成されたあと劇場座に本拠を構えて興行は順調で、テムズ川をはさんで川向こうの薔薇座に本拠を置く海軍大臣一座と勢力をわけあう劇団になったとはいうものの、宮内大臣一座には不安がないわけではなかった。一座の本拠地である劇場座の敷地の借地期限が残り少なくなっていた。

1585年に借地期限延長の交渉をしたときには、物別れに終わっていたからである。

1595年になると、2年後の1597年4月13日に劇場座の借地期限が切れたあとをどうするか、の問題はいよいよ切実になってきていた。期限の延長の交渉が再開されたのは1596年になってからのことであるが、その交渉に入る前に、ジェームズ・バーベッジは一つ別の可能性を探ることにした。目をつけたのは、ブラックフライアーズの修道院跡の建物である。

ブラックフライアーズ修道院の建物は、その一部が1576年に借用されて劇場として改装され一時的に少年劇団の劇場として使われたが、建物の所有者が劇場として使用することに抵抗をしめしたため、1584年以後は使われなくなっていた。そのブラックフライアーズ修道院跡の別の部屋を600ポンドで買うというジェームズ・バーベッジの売買契約書は、1596年2月4日付けになっているので、1595年内にはすでに売買の交渉がなされていたであろう。

一昔、少年劇団が使用していたころとは事情が変わったのであろうか。バーベッジはこの建物をさらに劇場として使用できるように改装することとし実行した。改装費用は数百ポンドもかかった。少年劇団が劇場として使用したときには、部屋は借りたものだったために、所有者からの返還要求にくじかれたのであるが、今回は部屋を買い取ってしまったのであるから、そのような邪魔がはいる心配はない。

そのような改装作業の途中であったか、あるいは終わったころか、宮内大臣一座にはまた一つ事情がかわった。すなわち、結成以来かれらの庇護者であったハンズドン卿ヘンリー・ケアリーが1596年7月22日に72歳で死んだのである。当時の劇団の庇護者とは一般的にはただ名前だけのものであるとはいえ、ヘンリーは一座結成の年にはロンドン市長に書簡をおくり、クロス・キーズ亭の使用の許可を求めるなど、援助をおしまなかった人物

である。

ただちにその息子のジョージ・ケアリーがハンズドン卿の地位についたが、宮内大臣の職はコバム卿ウィリアム・ブルックが引き継ぐことになった。というわけで、シェイクスピアの一座はハンズドン卿が庇護者ではあったものの、宮内大臣一座とは呼ぶことはできなくなったわけであり、このあとしばらくは正確にはハンズドン卿一座と呼ばなければいけない。

ところがここでまた一つ困ったことになる。二代目のハンズドン卿は例のブラックフライアーズ旧修道院跡に居を構えていた。そのほかにも貴族たちが住居をおく高級住宅地であったのだ。その真ん中にハンズドン卿一座の幹部リチャード・バーベッジの父ジェームズが部屋を買い取り、劇場にするために改装をほどこしたことに對して、1596年の11月になると、住民たちが劇場開設に反対の陳情書を枢密院に送った。劇場に改装することを差し止めることはできないとしても、劇場として使用することを差し止めることはできるとしたわけであろう。

その陳情書に付けられた署名には、奇妙にもハンズドン卿の名前があった。ハンズドン卿は、自分の庇護のもとにある一座に関わる重大事であるのに、劇場座の借地期限の延長の交渉が不調であるという事情には不案内であったのだろうか。それとも、ブラックフライアーズ劇場の件は父ジェームズ・バーベッジの独断で進められて、劇場の使用者である一座とは関係がなかったのか。ハンズドン卿にしてみれば、いかに自分の庇護のもとにある一座が上演するといっても、自分の住む同じ建物に大勢のロンドン市民たちがおしかけてくるのではかなわないということであろうか。結局住民たちの言い分は通ったので、劇場は使用できなくなり、バーベッジの目論みは頓挫をきたした。

1597年の2月、劇場座の敷地の借用期限が切れるのがあと2ヵ月後にせまってきたときに、ジェームズ・バーベッジが死んだ。残された遺産のう

ち、劇場座の関係の資産は息子のカスバート・バーベッジの所有となり、使用されないままのブラックフライアーズ劇場はリチャード・バーベッジの所有となった。

3月になると、宮内大臣の職にあったコバム卿ウィリアム・ブルックが亡くなったために、ハンズドン卿ジョージ・ケアリーが同月17日に宮内大臣となった。ハンズドン卿一座と呼ばれていた一座は再び宮内大臣一座となったわけである。

枢密院の命令書

ジェイムズ・バーベッジの死は、彼が進めていたような構想ではロンドン演劇界は進めないことを象徴したものであろう。劇場座は使用できなくなることは目に見えている、ブラックフライアーズ劇場に対する投資は何の役にも立たなかった。このような窮地から抜け出るためには、バーベッジの死を機会に進められた世代交代を有利に作用させ、なんらかの抜本的な解決策を講じなければならない。

1594年に疫病が一段落してのち劇団の再編後にできた宮内大臣一座は、もう一方の海軍大臣一座とともに安定した運営をしてきたことは確かである。しかし、1597年になって、演劇に対する風当たりもさらに強まってきたようである。その先頭にたっていたのがロンドン市当局であった。1597年7月には枢密院に書簡を送って、演劇の上演さしとめを要請した。

それに答えた枢密院は、ミドルセックス州とサリー州の治安判事にあてて即座に命令書を発行した。ロンドンとその近郊で劇の上演を中止するだけでなく、すべての劇場の所有者を呼んで、劇場を取り壊すべく命じることを委任する、という内容のものであった（7月28日）。ただし、この命令の上演さしとめは期限がついており、次の万聖節（11月1日）までとなっ

ており、暗に宮廷や地方での上演は認めるという内容であり、また、劇場取り壊しのほうも実行されないままに終わったのである。

こうしている間にも、劇場座の借地期限は4月13日で切れてしまっていた。あいかわらず延長交渉は決着がつかない。7月には先に述べた枢密院の命令がだされて、枢密院の命令にそむくという形でなければ上演は不可能になっている。宮内大臣一座と海軍大臣一座はその命令に従うために上演を自粛していたらしい。ただし、上演さしとめの期間——8、9、10月——というのは多くの劇団が地方回りをしているときで、いずれにせよロンドンではあまり上演されない時期であった。

枢密院の劇場閉鎖命令は、表向きの命令とは別に、本来の標的は白鳥座の所有者で興行主のフランテス・ラングレイであった。大きなダイヤモンドを不法所持し、怪しげな取引をしているという嫌疑がかかっていたのである。ところがラングレイは、劇場閉鎖の命令にそむくかたちで白鳥座でペンブルック伯爵一座に『犬の島』を上演させたのであった。その内容が治安を妨害するという理由をつけて、作者の一人ベン・ジョンソンと一座の俳優二人が投獄された。白鳥座は以後演劇を上演することはできなくなり、ペンブルック伯爵一座はロンドンに進出しようという望みを断たれ、この年の末ごろから再び旅回りの一座となった。

事件が一段落ついた10月には、宮内大臣一座と海軍大臣一座には再び上演許可が発行された。こうして上演が再開された時点で宮内大臣一座は劇場座を離れ、隣にあったカーテン座に本拠を移したと考えられる。劇場取り壊しに関する枢密院の命令は生きてままであったが、劇場の取り壊しの命令も実行はされなかった。約一年後には、劇場取り壊しの命令が生きてまま、新たにグローブ座が建設されることになるのである。

『犬の島』上演スキャンダルをからめた事件の重要な意味の一つは、ロンドン内に進出しようとした第三の劇団、すなわちペンブルック伯爵一座

がその目的を果たせずに、地方回りの劇団に転落し、残された二つの劇団がますます独占的な地位を確立したということである。ロンドンの北郊に本拠（少々トラブルをかかえているが）を構える宮内大臣一座と、ロンドン橋をわたったサザックに薔薇座を構える海軍大臣一座である。

翌年の1598年2月19日にもさらに枢密院の命令書が出て、宮内大臣一座と海軍大臣一座以外の第三の劇団の上演は許可しないことになったとき、最終的に上記二つの劇団のロンドン独占支配がかたまつた。二つに限定して許可するというのは、演劇に対して敵対的な姿勢をとり続けるロンドン市当局と、擁護の姿勢の枢密院（その背景には女王がいる）とのあいだの妥協の産物であった。

この命令書の内容で重要なことは、ロンドンで上演を許可することの理由である。すなわち、女王陛下から御前公演のお召のあった場合に、よりよい芝居を見せることが可能なように準備しておくためである、と述べているのである（女王陛下のお召に備えるためにロンドン市内での上演を許可する、という言い方は、これ以前の1578年にも、枢密院からロンドン市長にあてた書簡にも表れている）。

このように二つの劇団の市場独占がかたまつたとき、劇場座を父親から遺産として引き継いだカスパート・バーベッジの考えたことは、仮りずまいのカーテン座で上演するのではなく、劇場座にかわる芝居小屋（つまりグローブ座）を建てて、安定した本拠地にしてはどうか、ということであった。すでにブラックフライアーズ劇場の買収と改装に莫大な資金を投資しており、その資金を回収する見込みはまったくたない時である。また前年に出された枢密院のお触れにあった、劇場を取り壊すべしという命令はまだ生きているはずのときにである。

新劇場の建築には以上のとおり不利な状況であったが、あえて投資に踏み切ったのはなぜであったか。一つの考え方は、想像であるが、新たな劇

場、つまりグローブ座を新たに建てるということが、1597年7月の劇場取り壊しの枢密院の命令に反するどころか、かえって枢密院の意向に沿ったものだったのではないか、ということである。つまり、劇場座はすでに放棄しており使用されないままになっているし、その材木を使用してグローブ座を建てるのであれば劇場座は枢密院の命令に沿う形で消滅する。現在使用しているカーテン座も、宮内大臣一座が使用しなくなれば、使用する劇団がないのであるから、やがて自然に忘れられるであろう（劇場座とカーテン座を取り壊せとの前年7月の命令はそれで実効があったことになる）。そして、ロンドンには二つの劇団にのみ本拠を構える特許状を与えるという1598年2月の枢密院の方針に沿って、その本拠地として新たな劇場、つまりグローブ座を位置付けるのである。

以上のような条件が整えば、あえて新劇場の投資に踏み切ってみようという気持ちかでてきても不思議ではない。庇護者であるハンズドン卿は、枢密院の構成員であり宮廷における演劇関係の統括者の立場にあるのだから、枢密院内の演劇に対する取り組みかたに関する情報はおそらく一座に伝えられていたであろう。将来にわたっても、ロンドンの二つの劇団独占体制は変わらないという保証があれば、いかに投資額が大きいとしても十分引き合うことがわかっている。つまりリスクは少ない投資なのだ。

第二世代の劇場の誕生

グローブ座が建設されたいきさつはすでに最初に述べたとおりである。借地権の延長交渉は1598年の秋までぎりぎりつづけられたが、最後の望みも消えた。カスバート・バーベッジは、借地契約の条項にある権利を行使し、劇場を解体、搬送することを決意する。

やがて12月28日に、ピーター・ストリート率いる人々が劇場座におし

かけ、その建物を解体した。1599年1月20日になると、材木はテムズ川を越えて運ばれ、ロンドン橋から少し西へ行った場所に新しい劇場が建てられたのである。1599年の秋の興行には間に合うように完成した劇場は、グローブ座と名付けられた。

グローブ座の誕生において注目すべきことを三点取り上げてみよう。まず、建設場所であるが、なぜ、ライバルの一座である海軍大臣一座の本拠地薔薇座の目と鼻のさきに建設したのか？ 第二には、グローブ座の構造がどのようなものであったか？ 劇場座と比較してどちらがっていたか？ 最後に、グローブ座を建設する資金を調達するためのまったく新しい方法として、シンジケートが結成されて劇場を所有することになったことは、どのような意味があったのか？

これらの疑問点には、いずれも明確な答えが用意されているわけではない。ただし、それぞれに関するいくつかの事実があるので、それを検討してみることにしよう。

まずグローブ座の建設場所であるが、ロンドン橋を渡ったサリー州の聖セヴィア教区にニコラス・ブレンドの所有している土地に建てられたものであり、その契約は1599年2月21日付けになっている。すぐ近くにはライバル海軍大臣一座の本拠地である薔薇座があった。この場所を選んだ理由の一つだけは確実に推測できるものであり、つまり、そこがロンドン市当局の管轄の外にあったことである。

グローブ座がそこに建ったことで、もっとも危機感を抱いたのは薔薇座を所有していたフィリップ・ヘンズロウであった。グローブ座は、劇場座の材木を用いて作ったとはいえ、ライバルにそのように思わせるだけの立派なものだったに違いない。建ってからすでに20年以上も経過した劇場座をそのまま移築したようなものであったら、ヘンズロウがそれほど危機感を抱くはずがないからである。

薔薇座は1587年に建てからすでに12年を経過しており、途中で増改築はしているものの、真新しいグローブ座と比較したら、その古さがめだったのであろう。翌年1600年の1月にフィリップ・ヘンズロウは、グローブ座を建てた棟梁ピーター・ストリートと、ロンドンの北郊に別の劇場を建てる契約を結んでいる。グローブ座が完成するのを待つようにしてこの契約は結ばれたのかもしれない。

第二のグローブ座の構造であるが、これについてはさまざまな推測が行われてきたにもかかわらず、ステージや観客席がどうなっていたのかなど明確なことはまるでわかっていない。この小論の範囲内でグローブ座の内部構造について述べるができるのは次のようなことであろう。

劇場座を解体して得られた材木を用いて建築したということが真実であれば、劇場座の構造がなんらかの形でグローブ座の構造に影をおとしているであろうということ。ただし、20年以上も経過した材木を再利用するとすると、どれだけのもが利用できたか疑問は残る。

さらに、劇場座が作られたころと比べて演劇をめぐる社会的、政治的状況がかわったことで、劇場座とは違った部分もあっただろう。ひとつは建物の規模が大きくなったであろうこと。1ペンスで入場できる劇場であるから、収入を確保するためにはできるだけ多くの観客を収容することが重要である。出し物によってあたりはずれはあるかもしれないが、あたたかきときがきれいとき、できるだけ詰め込もうということになった。『犬の島』上演のスカンダルで上演ができなくなっている白鳥座が3,000人の収容人員であったことがたぶん参考になった。それくらいの規模にしても割りに合うと踏んだのであろう、グローブ座もほぼそれと同じ規模になったのである。

劇場座と変ったもう一つの点は、劇場座（おそらくカーテン座や白鳥座も）が演劇専用とは言えない多目的ホールに近く、芝居がだめならつぶし

もきく、というものであったのに比べて、グロブ座は、芝居上演が熊いじめなどの見せ物よりもずっともうかる、ということがわかったこと、枢密院のお墨付きによって将来にわたって独占的に上演できるであろうことがわかったこと、また、次にのべるように一人の興行主が経営するのではなく俳優達がシンジケートをつくって建築したこと、などにより芝居上演専用ということがはっきりとうちだされた最初の劇場であったろう。

次には、劇場座やカーテン座とならんで上演場所となっていた宮廷や貴族の館のホールとそれほど異なった構造をとることはできなかったであろう。特に、1598年の枢密院の命令書にあるように、ロンドン近郊で上演をする許可を与える条件が、宮廷にお召があって上演するための準備をするためというものであった。枢密院の顔をたてるためにも宮廷で上演するための準備をしているという体裁が必要である。お召があれば宮廷でも上演できるのですよ、という条件を満たすようにしたうえでグロブ座でも上演していることになるだろう。

最後の第三ポイントは、グロブ座を作って所有したのが、俳優たちのシンジケートであったということ。グロブ座以前の劇場は、いずれも一人の所有者がいて、劇団に上演させることによって劇場使用料（棧敷席の上がりのすべて、後には半分）を徴収するというものであった。劇場座（所有者ジェームズ・バーベッジ）、カーテン座（ヘンリー・ランマン）、薔薇座（フィリップ・ヘンズロウ）、白鳥座（フランシス・ラングレイ）はいずれもそういう劇場であった。ところが、グロブ座を作るに際しては、カスバート・バーベッジが中心になったとはいうものの、それに加えてリチャード・バーベッジ、ウィリアム・シェイクスピア、ジョン・ヘミングズ、オーガスティン・フィリップス、トーマス・ポープ、ウィリアム・ケンプからなる俳優たちが共同で出資したのであった（シェイクスピアだけは作者でもあった）。このようにして彼らは劇団の株主であると同時に、劇場の経営に

も株主として参加することになった。出資金に応じて、劇場使用料からの儲けもまた配当されることになる。

資金調達のためにこの方法がとられたことについては、劇場主となるはずのバーベッジ兄弟が、ブラックフライアーズ修道院跡の建物の取得と劇場改装に莫大な金をつぎこんでしまった直後であったため、資金調達において冒険を避けるため採られた窮余の一策であったとみなすのが普通である。確かに、後になってカスパート・バーベッジは(1635年)、グローブ座建設には多額の資金を必要としたので、その負担が多年にわたって重圧となっていた、という趣旨の発言をしている。だが、グローブ座を建設しようという将来をにらんだ思い切った投資姿勢と、資金調達をめぐるそうした消極的な姿勢とは相入れないように見える。

カスパートは、将来にわたって安定した収入がほぼ保証されているにもかかわらず、兄弟で借金することによる出資を選ばずに、共同経営の方を選んだのである。これまで見てきたとおり、リスクが大きいからというのは理由にならないのではないだろうか。共同経営となれば、儲けの配分など面倒な面も多くなり、また、一人の劇場所有者であるよりも取り分は少なくなることは目に見えているからである。

これとの関連で言えば、グローブ座の建設にあたって採用された俳優たちの共同体による劇場運営の方法は、後には同じ一座でブラックフライアーズ劇場の場合にも取り入れられたし、その後では、レッド・ブル座やフォーチュン座、さらにはカーテン座でも取り入れられるようになったという事実がある。一人の劇場主が経営する劇場を借りて上演するという形から、劇団を構成する俳優たちが劇場も共同で運営するという形に変わっていくのである。

このような傾向の最初の契機となったグローブ座建築のときは、確かに資金調達のための窮余の手段という側面があったとも想像できるのである

が、それと同じくらいに、俳優たちからの圧力、というか、要請として、「劇場運営に我々も参加するから劇場を建てよう」という声があったのではないか。もちろん想像であるが、そう考えた方が新劇場建築へとむかった積極的な姿勢に納得がいくのではないか。

ジェイムズ・バーベッジが劇場座を建設した当时には、まだまだ俳優たちの社会的地位は低くて、数年前1572年の法律では「浮浪者、乞食」と同列に扱われていた。ジェイムズ・バーベッジは実業家(ジョン・ブレイン)と組むことによって劇場建設にふみきった。そういう頃と比較したら、俳優の社会的地位は随分と高くなっていたし、経済力もついていたのである。シェイクスピアが父親のジョンの名前で紋章の使用許可を申請、認められたのは1596年10月のことである。翌年の1597年には、シェイクスピアは故郷ストラットフォードにニュー・プレイスという立派な屋敷を購入する。いずれもグローブ座建設に先立つ1～2年前のことである。

このようにしてグローブ座建設は、ロンドンの劇場の将来の見通しがほぼ自分たちの手に握られたことに自信を深めた俳優たちが、すでに経済力を高めて地位を向上させていたことに力づけられて、劇場の運営を一人の経営者の手から俳優たちの共同体の手中へと移していく、重要な契機であった。